

岡崎むかし館

＜戦時下の道具＞

せんそうがら うちわ
戦争柄の団扇

日清戦争から第二次世界大戦期(1894~1942年)は、戦争の情景や武器などを題材に凶案化して様々な道具などに取り入れられました。例えば、玩具、日用品、着物、商店などの宣伝広告物にも見ることができます。くらしの道具の中で見られる戦争柄は、政治的意図で普及したわけではなく、「めでたい柄」=「吉祥柄」として富や財産、長寿、幸福を願い用いられた一面があります。

この団扇は、裏面より幡豆郡一色町(現：西尾市)の魚問屋を営んでいた「柴崎辰三郎」により作製されたものとわかります。1937年(昭和12)の日中戦争によって日本軍が中華民国の南京市を占領した時期から、国民を総動員し太平洋戦争へと加速していった世の中の気運を象徴する図柄が描かれています。日本の吉祥柄の代表である鯛・恵比須・大黒と軍艦・戦闘機の組み合わせ、豊穰の実りの中のかかしの兵隊や「南京占領、萬歳、晩菜」[南京：かぼちゃの別称。「ハンザイ」(晩のおかず)の言葉遊び]、恵比須・大黒と「一億一心、貯金報国」、これらの図柄からは戦争の深刻さは伝わってきません。しかし、「一億一心」などの国策スローガンなどにより、確実に国民意識が戦争へと扇動されていた時代を表している、くらしの道具といえます。



(部分：「南京占領萬歳晩菜」、かかしの兵隊)



戦争柄の団扇 1938年(昭和13年)頃／岡崎むかし館



(部分：軍艦、戦闘機)

＜参考文献＞

乾淑子 『図説 着物柄にみる戦争』 インパクト出版会、2007年

鷹橋信夫 『昭和世相流行語辞典』 旺文社、1989年 / 前坂 俊之監修 『傑作国策標語大全』 大空社、2001年